家計部門の金融資産の動向

1　はじめに

日銀が公表した2003年12月末の資金循環統計（速報値）について，朝日新聞（３月15日夕刊）は「日本の家計，初の『赤字』ローンずっしり」，日経新聞は「家計の金融資産３年ぶり増」（同）と報じた。赤字にもかかわらず金融資産が増加したというのは，矛盾しているように思われるが，実際にはどのような状況なのだろうか。

2　家計の資金の出入り

資金循環統計のうち家計の金融取引表（フロー表）は，一定の期間中に，銀行への預金，投資信託の購入等や，住宅ローンの借入等の金融取引によって資産・負債がどのぐらい増減したか，そしてその結果として家計の手元資金がどの程度黒字，または赤字になったかを示している。手元資金は，資産増減額から負債増減額を引いた値がプラスであれば黒字となる。

98年から01年までは，家計は消費等に資金を使っても，相当額の資産を積み増すゆとりがあり，手元資金は黒字であった（第１図）。02年の資産増加額は大幅に縮小したが，負債も減少したため，家計の手元資金は引き続き黒字であった。

しかし03年には，負債が2.2兆円減少したものの，資産もそれを上回る3.4兆円の減少となったため，1.2兆円の赤字が生じた。不況の長期化につれ家計のゆとりが失われ，所得で消費等をまかないきれず，金融資産を取り崩さざるをえない状況であったと考えられる。

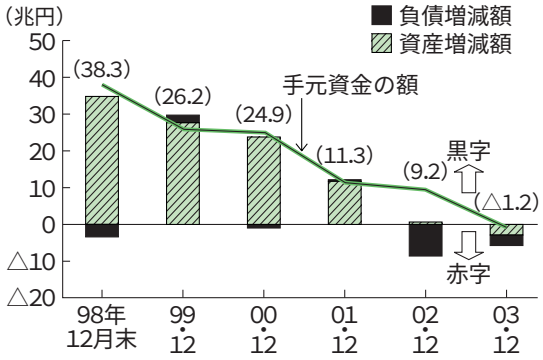
3　2003年12月の家計部門の金融資産

フローの金融取引の累積は，家計の保有する「金融資産・負債残高表」（ストック表）に表される。03年12月の家計の金融資産残高は，前年比1.6％増加して1,409兆円となった（第１表）。

先にみたフロー表では，金融資産の取り崩しが行われていたにもかかわらず，ストック表の金融資産が増えたのは調整勘定が増加したからである。資金循環統計では，株式や債券等については期末の残高を時価評価し，期中の価格変化による残高の変化分は調整勘定に掲載している。

03年12月の調整勘定の合計額は25.1兆円と金融資産合計の前年比増加額の21.8兆円を上回った。金融資産残高は，株価の上昇により株式や投資信託受益証券の含み益で増加したのであり，含み益を除くと，前年よりも約3.4兆円減少した。

第１図　家計部門の資金過不足の状況



資料　日銀「資金循環統計」
（注）　資金過不足＝資産増減額－負債増減額

4　調整勘定を除いた金融資産の動向

含み益増減の影響を受けない，調整勘定を除く金融資産残高の前年比伸び率は，雇用や所得をめぐる環境が悪化するなかで98年末の2.6％から徐々に低下し，03年末に

第１表　家計部門の金融資産（2003年12月速報値）

（単位　100億円，　%）

	残高	前年比増減額	調整勘定	前年比伸び率					
				98年12月末	99.12	00.12	01.12	02.12	03.12
金融資産合計	140,987	2,175	2,510	0.1	7.2	0.3	△1.3	△1.6	1.6
調整勘定を除く	-	△336	-	2.6	2.1	1.7	0.8	0.1	△0.2
現金・預金	78,792	547	-	4.6	3.3	1.1	1.5	1.5	0.7
現金	4,259	70	-	10.7	11.3	△1.2	10.7	7.2	1.7
預金	73,947	367	-	4.2	2.7	1.1	1.1	1.1	0.5
流動性預金	19,518	1,134	-	5.5	7.9	9.1	16.4	23.4	6.2
定期性預金	54,429	△767	-	4.0	1.8	△0.5	△2.2	△4.6	△1.4
外貨預金	577	111	-	47.2	61.3	31.2	1.8	19.3	23.9
株式以外の証券	6,802	△266	122	△8.5	△3.0	△0.5	△7.2	△16.0	△3.8
国債・財融債	1,338	77	△39	△11.4	△6.5	29.2	31.5	9.9	6.1
投資信託受益証券	3,239	391	179	2.7	12.5	14.7	△4.6	△11.4	13.7
信託受益権	1,339	△482	-	△14.5	△12.9	△15.8	△17.9	△27.7	△26.5
株式・出資金	10,405	1,756	2,122	△27.2	79.2	△13.1	△21.7	△15.6	20.3
保険・年金準備金	39,422	△499	-	3.6	2.9	3.3	1.0	△0.4	△1.2
保険準備金	24,961	△559	-	1.9	1.3	0.8	0.1	△1.3	△2.2
年金準備金	14,461	61	-	7.5	6.4	8.2	2.5	1.3	0.4
対外証券投資	1,064	401	0	△16.6	10.2	43.2	31.5	△11.4	60.5

資料　日銀「資金循環統計」
（注）　内訳は表示を割愛した項目があるため,合計しても金融資産合計の残高と一致しない。

は△0.2%となった。

調整勘定のない金融資産のなかでは，残高の大きい預金と保険・年金準備金の伸び率がいずれも低下している。預金については，定期性預金等のペイオフ凍結解除の実施により，定期性預金から流動性預金へのシフトが進んだ。足元ではシフトも弱まってきているが，預金全体の伸び率は03年末には0.5%となり，過去３年の1.1%から低下した。

保険準備金は02年末に減少に転じ，年金準備金も伸び悩んでいる。所得が伸びないなかで予定利率の引下げの問題が報じられ，家計は生命保険の加入を控えたり解約を進めたりしているとみられる。また，資金循環統計の保険準備金には積立型保険の責任準備金は含まれるが，掛捨型保険の責任準備金は含まれず，保険料の安い掛捨型を利用するといった商品の見直しが行われている可能性もある。

5　市場性金融商品の増加

一方で，対外証券投資，投資信託受益証券，外貨預金等の残高は，株価や為替相場の変動による含み益を除いても増加している。都市銀行等のなかには，外貨預金や投資信託を積極的に販売し，預金以上に新規取引額を増やしているところもあることが反映されていると考えられる。

家計全体としてはゆとりがなくなり金融資産の取り崩しが行われている反面で，余裕資金があったり，リスクは高くても高利回りを期待したりする世帯では市場性金融商品の利用が進展しているとみられる。

（副主任研究員　重頭ユカリ・
しげとうゆかり）